

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25862111

研究課題名(和文) 看護実践現場の一員として成長する看護学実習教育体制の検討

研究課題名(英文) A nursing training system that grows as a member of the clinical nursing team.

研究代表者

三谷 理恵 (MITANI, RIE)

神戸大学・保健学研究科・助教

研究者番号：70437440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護学生の看護実践現場への参加の視点から学習過程を捉え、看護学実習教育体制を検討するために、看護学実習での参加観察、看護学生及び実習指導者への面接調査を実施した。看護学生は、患者の看護の一端を担い看護師の実際の思考過程の共有や共に実践する関係性の中で、看護師として患者への向き合う姿勢、思考力、調整力を学び得ていた。看護学生が患者の看護を実感し成長していくためには、医療現場と教育機関で実習教育の目的や、看護師と共に実践する意義を共有し、指導体制を構築する必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to understand the learning process from the standpoint of students participating in nursing practice in an actual medical environment, and to examine a nurse training system. Study methods involved observation at a clinical nursing practicum and interviews with the subjects. Nursing students learned about proper attitudes and acquired coordination skills as they worked with patients, and also learned about their responsibilities as they were given partial responsibility for patients, shared in the actual thought processes of nurses, and in their practice. The results suggest that, for nursing students to truly experience the nursing of patients and to grow and develop, they must share the goal of training in an actual medical environment and in educational institutions, as well as the significance of putting their training into practice with nurses, all of which requires the creation of an instruction system.

研究分野：基礎看護学

キーワード：看護学実習 看護学実践現場 参加 学習過程

## 1. 研究開始当初の背景

高度化、複雑化する医療現場の変化は、看護師に高い看護実践能力を求めている。その要請は、看護基礎教育機関にも同様であり、看護学生（以下、学生）の看護実践能力の育成が期待されている。しかし、対人関係能力の低下、生活体験の乏しさなど看護学を学ぶ上での準備性が十分とはいえない学生が、看護基礎教育養成期間の中で、求められる看護実践能力とともに看護者としてのアイデンティティを形成していくためには、従来にも増して臨地実習教育の効果的な展開が必要であると考えられる。

従来の看護学臨地実習教育に関する研究では、学生の学びや、教授者の指導方略に対して、局所的に捉えていたものが多く、学生が、現実の看護実践現場という複雑な状況下に身を置いている中で、学習を行っているという事実は、あまり重要視されていなかった傾向にある。近年、学習を個人が獲得する能力ではなく、社会的実践としてとらえる状況的学習論が注目されている。本研究は、学生の看護実践現場への参加という視点から、看護学臨地実習現場で生じている学習過程を捉えることを試みた。

## 2. 研究の目的

- (1) 4年間の臨地実習を通して学生が実感している学びの把握
- (2) 臨地実習における学生の看護実践現場への参加と学習過程の把握
- (3) 臨地実習における看護実践現場への参加に対する指導者の認識の把握
- (4) 看護実践現場の一員として成長できる教育体制の検討

## 3. 研究の方法

(1) 調査 : 4年間の臨地実習で学生が実感している学びの把握

4年間で実施されるすべての実習教育を履修、修得した学生で、面接調査への協力が得られた学生に対して半構成的面接調査を実施した。面接内容から、学生が学べた内容、場面に着目し、質的記述的に分析を行った。

(2) 調査 : 臨床実習における看護学生の看護実践現場への参加と学習過程の検討

### 調査 1

研究協力の得られた看護系大学で実施された、臨床看護学実習における参加観察、および実習終了後の面接調査により、学生が実習現場においてどのように自己を位置づけ実践しているかを把握した。

### 調査 2

研究協力の得られた看護系大学で実施された統合看護実習で、現実の看護実践現場に近づく体験として設定された「複数患者受け持ち実習」を体験した学生のレポートから、

学生の学びの内容とその学習過程に着目し質的記述的に分析を行った。レポート提供者のうち、面接調査の協力の得た学生に、統合看護実習以前に体験した臨床看護実習と比較しながら看護師との関わり、看護実践現場の自己の位置づけとその中で学習過程に着目し質的記述的に分析した。

(3) 調査 : 臨地実習における看護実践現場への参加に対する指導者の認識の把握

前述(2)の調査 1、2において、研究協力が得られた学生が実習した病棟で臨地実習指導者の立場にある看護師から実習終了後の面接調査を実施した。指導者が捉えた課題や学生の学び、学生との関係性に着目し質的記述的に分析した。

以上、全ての研究過程において、神戸大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認を得て実施した。特に学生の学習活動でもある実習場面の参加観察においては、学生の学習内容へ影響しないよう十分配慮の上、調査を実施した。

## 4. 研究成果

研究成果の一部は、今後の成果発表部分も含まれるため、以下4点の視点からその概要を報告する。

(1) 4年間の臨地実習で学生が実感している学びの把握

4年間の全実習を終えた学生に、自分の学びの場面を想起し、その内容を整理した。

学生は実習を通じた学びに、[患者主体で考える重要性]を共通して語った。この学びの契機には、自分自身が「自分が何をすればよいのか毎日悩む」「実習課題だから取り組んでいる」といった<実習課題の遂行を優先する>、「必死にやっても指導者や教員から理解してもらえない」等<自分に対する他者評価にとらわれる><患者の存在を見失う><患者の援助を見出せない><自分が理解できる範囲での実践>等、学生の理解できた範囲のみで介入しようとする等の体験があった。しかし、教員との振り返りや、<患者を理解しようとする姿勢>の必要性や、<患者の視点に立つ重要性の実感>を伴う体験から[患者主体で考える重要性]を学びとしてあげていた。これらは1つの実習の中で形成された体験として語られる場合もあったが、複数の実習を経験する中で、自分本位の実践に陥る自分への気づきの体験から、改めて[患者主体で考える重要性]の意義を深める等の経過も見られた。

看護学実習は、学生にとって「学習」と「看護実践」という二側面が存在する。学生は学習者として取り組み始めるが故に、自分が実施できることに囚われ、患者の存在を見失う傾向が示唆された。しかし、様々な実習体験を通し、とりわけ、患者からの反応や振り返りの機会を通して患者の視点に立つ重要性という利他的態度の形成に寄与している側

面が示された。

一方、実際にどのように現実の看護場面に参加したことが、学生の学習過程に影響するのかを明らかにすることは本調査では困難であり、参加観察による学生の実習活動の実態の把握を試みた。

## (2) 臨地実習における学生の看護実践現場への参加と学習過程の把握

### 調査1概要

対象とした臨床看護学実習は、3年次後期に開講されており、成人、老年、精神、母性、小児の5分野を随時体験する。対象実習は成人分野で開講された実習(以後、実習A)である。次に、4年次に開講された臨床看護学実習(以後、実習B)は、2クールに分かれて実習が展開されており、対象は成人分野であった。学生はいずれの実習でも1名の受け持ち患者を担当していた。学生は担当患者に対する日々の活動計画を立て、看護過程を展開し、計画立案、実践、評価する一連の活動が期待されていた。

学生は、看護師との関わりに対し、「看護師の実践の流れを邪魔しない」「学生が看護師の実践を邪魔しない」こと、即ち現場で展開される患者への看護活動を阻害しないことを常に意識していた。これらは学習段階に関わらず共通して語られていた。

看護師への関わりは、実習体験が重なるにつれて異なる様子が伺えた。実習段階が初期の学生は、「実習の流れも、患者の流れもわからない」と現場の時間の流れが見えず、自分がどのように現場の活動に参加してよいのか迷う体験を語り、学生が看護師との接点を自らもてない様子が示された。しかし、4年次実習Bの学生は、「これまでの実習で大体看護師の一日の動きがある」と語り、臨床現場の流れを実習当初から掴み、その上で、「看護師の実践の流れの邪魔にならない」タイミングで自ら報告する行動をとっていた。このように、複数回の看護実践現場に入る体験から、学生は、患者への実践内容だけでなく、看護チームや看護師の活動の一日の流れを掴みながら、看護師へ接近を試みていることが推察された。また、看護師との報告、相談内容も、実習Bでは、「自分の意見を持って相談することができた」と語り、単に見たことを報告するだけでなく、「看護師としての報告・相談」の体験へ変化している様子が伺えた。

次に学生の患者への看護行為の受け止め方により、看護行為に対する責任の自覚には異なる様相があることが推察された。例えばある学生が「患者の観察結果や判断を求められていない」と語る背景には、自分と同じ看護行為を看護師も実施しているため、看護師が患者の判断をしてくれている中で自己の実践を位置づけている様子が伺えた。一方、学生が得た患者情報で看護師に報告した内

容が、看護チームにも共有される体験や、バイタルサイン等観察結果が直接カルテへ反映されていた体験をした学生は、自己の看護行為が直接患者に反映されていることを実感し、自分の行為に対して、「怖い」「きちんとしなければ」という意識を語り、自己の実践に対する責任をより自覚する様子が示されていた。

また、学生の実践と看護師の日々の実践がつながる部分と、看護師とは違う次元で展開される部分もあると認識していた。違う次元で展開されると認識していた主たる実践例は、学生が行う患者指導であった。指導用パンフレット作成には、看護師や教員からの指導・助言の機会も多く、学生は看護師とのやり取りの中で自らの学習の不足点や、指導に向けた改善点を学び取っていた。しかし、パンフレットは、患者に活用してもらう媒体であるが、看護師と共有する媒体としては理解していなかった。ただし、看護師とは共有しなくとも、患者の手元に残るものであり、説明には責任が伴うものとして理解され、患者への説明・指導行為に対する責任は強く自覚していた。このように学生は、患者に直接影響する実践に部分的でも参加している感覚を持つことで、その行為に対する責任を自覚し、同時に実践における怖さや不安さも自覚していた。自己の行為が患者の看護実践に影響していることを意識することは、学生の専門職としての意識や学習過程に関与していると推察された。

なお、看護チームの中での位置づけでは、あくまでも「学生」であると語った。しかし、一部のケアと一緒に実施する、看護師と一緒にケアを考えていけた感覚は、チームの中にはないが、「チームに近くなる」感覚として語られる場合もあった。学生と看護師の実践の関与や学生の受けとめ方は、今後もさらに詳細な検討が必要であると考えた。

### 調査2の結果概要

統合看護実習で初めて複数患者受け持ち、5日間連続した病棟実習を体験した学生(以下、実習C)および1人目の受け持ち看護を展開しながら実習の後半2日間ないしは3日間のみ複数患者受け持ちを体験した学生(以下、実習D)のレポート内容分析の概要を示す。

学生は、従来の一患者を受け持つ実習と異なり、二人の患者を同時に担当することに対して、現実的な時間制約を実感していた。その上で、異なる看護度の患者を同時に持つ体験から、<患者間の優先順位を考え効率よい時間配分を考える><急変リスクやケアに必要な時間をより綿密に予測する><患者のケアニーズにあわせて介入するために自由に動ける時間のゆとりを作る><患者の意向・状況に応じて柔軟に時間配分を変更する>など[時間の組み立てを意識(する)]していた。さらに、<自分以外のほかのスタッフの動きも意識する><チーム全体の動

きを考え行動する><チームで連携するためにタイムリーな報告・連絡・相談・情報共有の大切さを実感する>等[チームの中の自分を意識する]視点を新たに掴んでいた。

また、複数患者を受け持つことは、異なる看護度や患者へのケア介入機会の頻度の違いを体験することでもあり、<直接介入する時以外でも意識的に患者へ挨拶や一声をかける><患者と関わる機会を意識的につくる><援助中の患者への意図的な情報収集をより意識する>など[患者への向きあい方の変化]を得ていた。一方で、複数患者を受け持ったとしても従来の看護学実習で学んできた体験と照らしながら、<患者の治療経過を踏まえた現在の患者への目標を明確にして関わる重要性を再認識する><看護問題の背景要因を明確にして看護計画を実行する大切さを再認識する>[全体像を捉え看護する大切さを再認識する]こと、[記録・情報を他者と共有する重要性を再認識する]ことを述べ、担当患者数が増加したとしても、看護をするうえで重視する点は共通していると理解していた。

学生は学習過程について、「看護師と一緒に行動することを通して看護師の一日の組み立て方を知る」「看護師と共に行動することを通して時間調整、多重課題の対処の仕方を学ぶ」等が提示されていた。また看護師の実践と比較し、「自分の計画性の甘さの自覚と看護過程を展開する上での課題の自覚」「看護師として働く上で自分に不足して力量の不足の自覚」等、[看護師としての自分に不足している力量の自覚]するとともに[看護師としての将来像のイメージ化]が示されていた。

次に、前述した複数患者受け持ち実習のレポート提供者の内、面接調査への協力が得られた学生の面接調査概要を示す。

学生は、前述の通り物理的な時間の制約を自覚していた。しかしこれは、単に「患者に関わる直接的なケア」時間だけでなく、患者を理解するために必要な、「情報収集」や、自宅での「自己学習」時間も不足する実感として語られ、結果的に適切な看護ケアが実施できない体験にも繋がっていた。

例えば、学生は患者 を担当する際、従来の実習体験を下に学習を進めるものの、時間が足らず限局的な学習のみで看護計画の立案を試みた。しかし、看護師の指摘を受けて、看護師と自分の看護方針の異なりに気付く体験をしていた。学生は、「全然看護になっていない」とその実践を振り返り、患者にその時必要な看護を考える必要性を語った。加えて、従来の実習では「病名・病態を全部調べ、患者の全てを知ってから介入する」という考えから、「患者がどのような理由で入院し、治療し、退院していくのか患者の療養の流れで理解していく」と語り患者理解の枠組みの変化を語った。さらに、学習時間の不足から患者援助の根拠がおろそかになって

いることを看護師から指摘され、「どんなに忙しくても、見落としてはいけないことがある。人の命に関わっている。」と自分の実践が患者に及ぼす影響を考えなおす機会となっていた。

学生は共通して複数受け持ちを実践したからこそ、[一人ひとりの患者をみて看護をする大切さ]を実感したと語った。従来の実習でも患者の個別性を理解し患者を主体に看護を展開する重要性を学生は述べていた。本実習では自分がある程度の責任を持って複数名に関わり、その中で患者の個性を比較することから、個別に看護する重要性をより深く理解していたと考える。

学生は、看護師と共に看護を実践し、対話を通して看護師の実際の思考過程を共有すること、看護師と学生自身の思考の比較をすることから、学生自身の思考の不足点や、患者に向き合う姿勢に対する振り返りが促され、学生の学びを生み出していたと考える。また、援助の一端を担いながら複数の患者を受け持つ体験は、患者の個別性を理解して看護する重要性をより強く実感させていた。そして、より現場の看護に近づき、看護師と共に実践する体験から、今後看護師として何を大事活動すべきか、看護師としての譲れない価値観の形成につながる学びを得ていることが推察された。

学生は、従来の実習に比較し、より看護師と「一緒にやっている」「一緒に看護を考えてもらえた」感覚を指摘していた。例えば、従来の実習では、学生は指定時間になれば学生カンファレンスのため病棟を離れていた。その時間帯は看護師にとって、患者へのケア介入や夜勤帯への引継ぎに向けた報告等が求められる時間である。そのため、学生の報告の後にその日の実践の振り返りを看護師と一緒に行う時間の確保は難しい状況が、調査1でも散見されていた。そのため、学生は報告する時間までに看護師と連絡を取る難しさとして自覚し、時間制約がある中で、とにかく伝えるといった行動をとる傾向もあった。しかし、本実習では看護師の勤務体系に沿いながら学生と臨床現場の時間軸を共有していたことが、学生と看護師が共に実践し、振り返りを行うことを可能にした要因の一つとして示唆された。

### (3) 臨地実習における看護実践現場への参加に対する指導者の認識の把握

ここでは前述の統合看護実習(実習C)で学生の指導を担当した看護師の面接調査結果概要を示す。

指導者が認識した学習効果は、[時間管理の視点の形成][優先順位の視点の形成][スタッフと一緒にケアに参加する姿勢][2名の患者に必要なケアの実践の展開]であった。特に、「臨床の時間軸で学生も考えていた」と、従来の実習に比較しより現実に近い中での看護実践として学び得ている点を指摘し

た。一方、学生の課題には[追いつかない患者理解][患者理解が不十分なままの実践][一方の患者のケアへのとらわれ][時間管理やタスク管理の視点ばかりに傾く][実習に臨む姿勢の不十分さ]等が挙げられ、複数患者を受け持つ体験がかえって看護の本質ではなく、業務志向性を生み出すことの危惧や、十分な理解のない患者理解のまま実践していることへの危惧として表現された。

指導体制では、実習目的・目標の周知不足や、スタッフ間の連携不足等[指導体制の不十分さ][教員との相談調整の難しさ]、時間の制約等による[指導方法の不足感]や[指導・介入の程度に対する判断の難しさ]が生じていた。さらに、大学の設定する[実習目標に対する疑問]、[実習方法に対する違和感]や、[臨床の意向と大学の実習目的の乖離]、[イメージしていた学生の状況と現実との乖離]という大学-病院間の連携上の課題が生じていた。特に、実習目的・目標に対する大学-病院間の具体的な共通認識の乏しさが、大学-病院間の連携や指導体制整備上の課題に繋がっていた。また、看護チームの中で具体的に学生に期待される活動内容や、看護師から何を学生に支援すればよいのかに対する戸惑いも示された。

以上の結果より、効果的な指導体制構築には、教育機関が求める目標の文言的共有ではなく、実際の看護実践活動の中でどのような看護活動に学生が参加し、実践できることを期待しているのか共有する必要性が示唆された。また、学生の学びの内容を共有することで、看護実践現場で学生が共に実践する意義を共有していくことも必要であると考えられた。

#### (4) 看護実践現場の一員として成長するために必要な教育体制の検討

学生は受け持ち患者との関わりを接点に看護実践現場に参与する指導看護師、スタッフ看護師に関わっている。学生が行う看護実践が患者に直接影響している感覚は、自己の実践に対する責任の自覚につながり、より正確な実践や学習への動機付けにもつながっていた。しかし、時に学生は自分の実践行為の後ろにある看護師の実践行為にその判断のすべて委ねている場合も見られた。患者の安全を確保する観点から、看護師が患者のケアや状態判断を実施するのは、患者の看護の質の保証、安全確保の上で重要であり、当然看護師に必要とされる実践である。そのため、患者への直接的看護ケアを学生に任せることが難しいことは、患者を守る上で必要な場面は多い。しかしその中でも学生が患者の看護の一端を担う感覚を感じさせていく関わりが必要であると考えられる。特に、学生の患者への取り組みを学生固有の体験とせず、現実の看護実践に繋がる体験と意識化していくためには、看護実践現場のメンバーからの支援も不可欠であり、教育体制構築に向け

てさらに検討の必要性が示唆された。加えて今回の調査では、学生の学習段階によって看護実践現場への参加の様相は異なる可能性も示唆された。今後、学生の学習段階に応じて、看護実践現場の参加の様相の変化とその意義を検討する必要があると考える。

#### (6) 本調査の限界と課題

看護学生が患者への現実の看護実践の一端を担い、看護師とともに実践と思考を共有し、一緒に行う感覚は、学生に看護師としての思考や実践に対する実際的な学びと共に患者への行為の責任や向き合う姿勢を醸成することが示唆された。しかし今回の調査は、限られた事例での検討であるため、学生の看護実践現場との参加の様相とその学習過程の全体像を捉える上での限界がある。本調査結果を踏まえ、さらに看護実践現場との参加の在り様が学生の学習内容や、その後の看護師としてのアイデンティティ形成への関与について詳細に検討を重ねていく必要があると考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

Rie Mitani, Megumi Katayama, Keiko Sekido, Yuko Uesugi, Mio Hosona, Yasuhiro Nakanishi, The learning attained through practical nursing training experiences: perspectives of nursing students. The 35<sup>th</sup> International Association for Human Caring Conference (国際学会)2014年5月24日~28日、京都国際会議場(京都府京都市)

三谷理恵、齊藤奈緒、上杉裕子、關戸啓子 複数患者受け持ち看護実習を体験した学生の学びの様相、第26回日本医学看護学教育学会、2016年3月12日、島根県立大学出雲キャンパス(島根県出雲市)

三谷理恵、齊藤奈緒、上杉裕子、關戸啓子 複数患者受け持ち看護実習の指導体制の検討、第27回日本医学看護学教育学会、2017年3月4日、和歌山県立医科大学看護学部(和歌山県和歌山市)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

三谷 理恵(MITANI Rie)

神戸大学・保健学研究科・助教

研究者番号: 70437440